

9
80
1
2
3
4
5
6
7
8
9
90
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5
6
7
8





御事付書院

印物也 全三冊

本多重輝 拙書院藏

只今、先の毛呂山をうち前
為事のうかがひえ、東の福がま
高いに友あひも在ふて、而ひれきむ所
車の西あおむと、拙書院
反古の筆致あひて、取て有る
事あらば、かくせひと用、拙書院

義人書

盛

附言

- かるをかるき草紙の裏名を記すと既序も其意して
出る書肆見て笑て曰翁は草雙紙の作教種の處もあく
人ふ名を知らまつて説のよりあひをも名のと見ゆんとあ
名きて誰うりをりんと此物理あれ言房の意よまうせう
○あれあれも物部の友人より和漢の學者多くより是がから
あら砂も玉の光りを添へされと益るき書ふ他を勞せんも心るによ
似て此ふ作るると婦女子よ讀やむかとあんくあるを
たふ校正をやまと
- 削廟のりづらうからんが思ひ條の条簾の外ふ略せし類何まく
又あのとりぐるふ是の字或当されば義のくづり難きところけれど通用
して此ふ作るると婦女子よ讀やむかとあんくあるを

用捨箱目錄

上之卷

- 一 草紙の讀初
二 もいぢやの童謡 初サウラ
三 餅屋の看版 ニウラ
四 後暗觀立日 六丁オモテ
五 鍋取杓子の古製 七才
六 六郷酒匱之土橋 ハウ
七 昔之祭禮 九ウ
八 粥の木折かけ燈籠龍 十ウ
九 御事納 追考下サハウ
十 伊豆山迺榔の葉 十四ウ
十一 六方詞 十五ウ
十二 春秋の繪檀 二サウ
十三 捨、ゆるとり曲子 サニウ
十四 米饅頭乃名義 廿四才

中之卷

- 一 候窟くわ
二 在家の高燈竹籠二才
三 禿の菖蒲うち三才
四 紙帳賣。紙子賣四才
五 金銀と伽羅とひ隱語五才
六 荷ひ風呂七才
七 椿頬燕脂七才
八 涙法師。ゑ法師九才追考下サ九才
九 掃地坊
十 さむりん坊十才
十一 やんちや坊十才
十二 そられん坊十才
十三 七色賣十三才
十四 誰袖。花袋十七才
十五 土手節。加賀節十九才
十六 質屋の看版
用捨箱上首三

十七 鎮鉢屋の金魚 十三才
十八 物代賞美て伽羅といふ廿四才
十九 師走坊主廿五才

下之卷

- 一 ぐをなみ 草の山
二 淨瑠璃本刊行の始 初丁才
三 與淨瑠璃五才
四 蚊帳ふ香袋を掛け 七才
五 枕簾笥八才
六 夢想枕 夢想流の髪 九才
七 灌井山三郎十才
八 八人座頭十三才
九 錢獨樂の流行十四才
十 俳諧の句を狂歌と誤る 十六才
十一 下帶と手綱といふ十九才
十二 別當といふ俗語二十才

- [十三] 太郎 次郎 廿一
 [十四] 天ヶ紅 尼ヶ輕粉 廿三
 [十五] 溫飪屋の看版 廿四
 [十六] 大女房阿与米 附東春 廿六
 [十七] 袖頭巾 卅七
 [十八] 追考二條 廿八

通計五十一條目錄畢



用捨箱上之卷

柳亭種彥編

一 草紙の讀初

昔の正月吉書の次ふ冊子の讀初とそ女子ハ文正草紙と讀ーときり今もひる大家ふその古例残アソアリ此きし今多く傳の大本小本摺板の教あるも昔を家くふるくてかうじやう冊子よしげ故より標題よりひの草紙と書ふる所是その証すと古考の記ふたえぞる按るふ此説さもゆうん候俳諧のうり鶴とひふ集ふ
 書初ふ 文章の文よひやくれ姫小松 女 章の正の假字
 こあり是宝永元年の印本より當時まで彼草紙の讀初とひ事のあくー故向
 鮮ホヨリ初春の季を持へる。さて此草紙もこあへまつて事の淨瑠璃ふ作りてゐ
 た候様正勝がかり小歌ふづりふるは松の落葉ふ載るても知ら踊どもの安宅ふ

常陸國のつゝうふ金の花^{さき}とあとも文正の事也角昌天正の古寧本小角
柳川をよみづつ歌ふうふとゆう此草紙廢れてその歌も絶却て遠國へ残ヤー
えべー此一條殊^{やう}ふ奥^{さき}詰されど草紙の讀初とくふ因て初ふ記し

二 ちのちやこひの童謡

前ふ記し踊^はせり 安宅^ちハ近き物をぐう古き小歌を綴^つりられ故解^かき事多^す
其^そらふ。ちのちやこひやかつうの葉とくふ語れ遊びあるこの童謡を櫛^{くし}や辛夷^あや。
桂^{けい}の葉とくふを歌ひ誤^まり^き 条^{じょう}「秋も多^たむの野分の風ふぬちやこ^ぎやかつうの葉柳^{やなぎ}やも^もりく
ちよ^うと又^や信田小左郎^{さち}【作者不知】^ふそきごりだんと同とあひてあや^ふふひ^ふをうさ^かくれん
をうふまうらぬ者^ひ、ひよちやこ^ぎやかつうの葉^よをかく^く。かく^く。足のひも^もふ
ちよ^うく走^はり^よ【以上二種^べ】^{淨福齋^{きよふくさい}}又^や写本吉原つれく草^{くわ}【宝永年^{ふよ}間作】^ふ彼花街^かを大^お臺^{だい}とぞうある客^き

用捨箱 上一

我^わの娘^{むすめ}がる事^{こと}うと誇^ほるを西^{にし}揚屋^{あきや}の男^おの答^{こた}詠^ふ「をきるきより熊^{くま}皮^{かわ}をうひ
併^{あわ}れど譯^{わけ}娘^{むすめ}の事^{こと}うとくれんをうづらぬ者^ひちのちや子持^{こもち}やかつうの葉と
や^う事^{こと}うとく意^いふううんとやシクリ大^お臺^{だい}とぞとつまつて是^{これ}は子^こもの^{もの}う事^{こと}あれば
りふく^くうござりそれが^れとあれば百年の昔^{むか}に江戸^{えど}も此童謡あり一事明^あき
京^き近^{ちか}き田^た舎^やを今^{いま}も歌^{うた}ふとゆ^くと^く屋^や島^{しま}八景^{はっけい}とくふ
踊^はりうすみや

空^{くう}礎^{モリ}

慶安三年

比句又^{また}嵐山^{あらしや}

集人^{しゆじん}作^{つく}者^{しゃ}

印本

季吟廿會集

寛文十二年ノ卷

自匂の集^{いみのしゆ}

あつまひて遊ぶ桂の里^す子供^{こど}宗英

季吟

雲^{くも}よ月^{つき}いかくれんをうり桂の葉^よ立^た園^{えん}

自匂の集^{いみのしゆ}

丹波

辰^{たつ}なりかくれんをうり桂^{けい}山^{さん}不^ふ恐^{おの}

俳^{はい}施^せ

寛文八年刻^く

古くより源れ遊びふ歌ひ一事是等の句を知らる又歌ひ誤りも古く

嵐山集 慶安四年良徳撰
明暦二年刻

磯

つちやこぬ一かつての里ふ携衣 吉景

後砂金袋

延宝二年西武撰ト
俳書目録ニ見エタリ

辛夷

月うつはちよとぞよ桂の葉 作者未聞

雑巾 延宝九年刻
常矩撰

大黒のつちやこぶ一やまとみそび

慶安中よりたる櫛やをつちやと誤り一かども辛夷やと子やちやと誤りにア
延宝の後うる証ふあぐじ二句やが源れ遊びの事ハ見テモ

〔三〕餅屋の看板

我衣 古來饅頭見る見世の縁先ふ本馬を出しそうアラウマーヨル心と表す

用繪箱 上二

たり元禄のはやまよりとの事の此草紙ふ合せ考へき事と未見りを

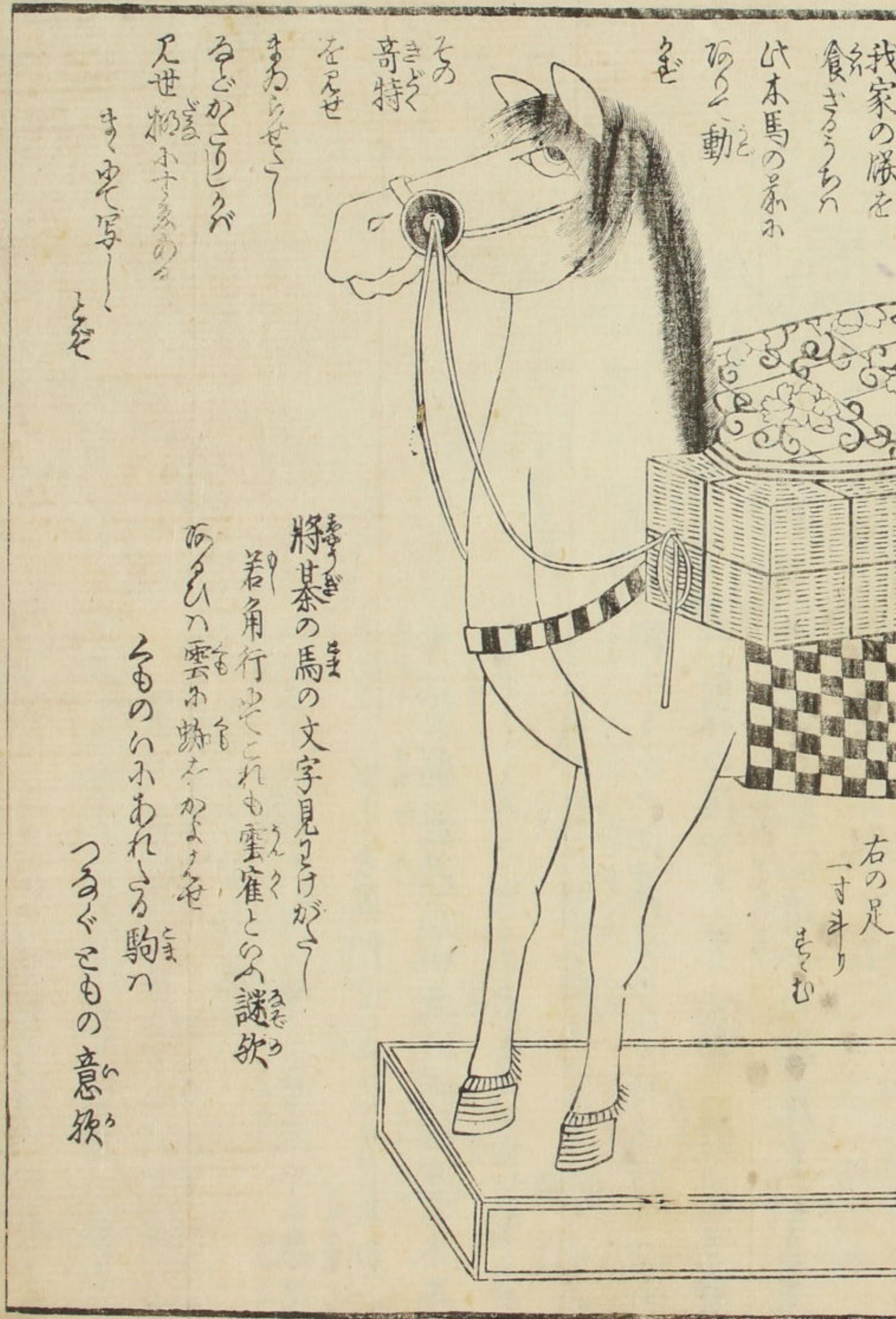
〔江戸三吟〕

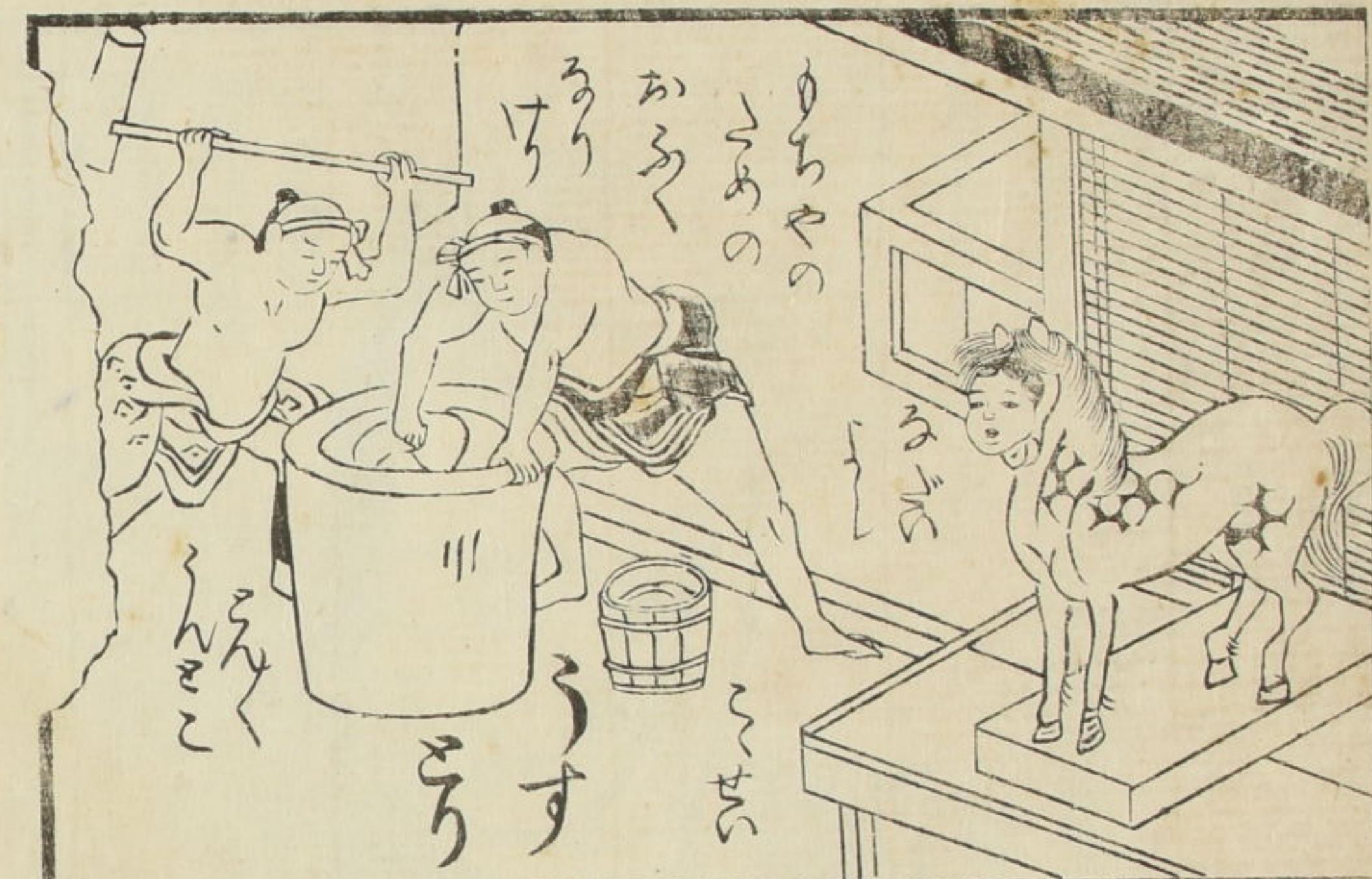
延宝六年
印本

千早振本で作りしる神姿 桃青

岩戸ひしけて饅頭の見世 信章

若匂と本を作り神馬と見饅頭の見世と附する若それかとわらひの此
附合の句のみあり。さて我衣ハ江戸の古老の筆記され他國未今もあるべと探
りて今難波ふ住る友人其樂子が写て便の序よ木馬の看板二所あり。大坂大宝
寺町筋心安橋東北側世俗馬の餅屋と唱又河内園石川郡上太子への追分
角角屋との餅屋此木馬ハよ古雅あり主人小故を同へば我家の餅ふ足が
つてうすまゆふうり昔より此看板を出しきる一と答ひこのひをこそる其後旧友
觸山翁河内園の知方をうへ彼角屋の木馬を巨細うますて送られとあく不織圖を





上よ摸へるに近く宝曆の頃刊行る
か御もつとより草紙小豆えする圖す
圓さり 角力さり 筆さりなどり事^事を
あらむもかとスレ戯れ草紙を印取る
江戸ふひそひぞりるべー
如ひ馬小假面をかぶせし看板今不羅波
ふありとゆ一が其所を忘^手是則心
板橋の餘屋旅は画我衣^{えん}ふ縁先^{えん}木馬
をぬ^ぬとひるふ合^あを馬不面^{めい}をかぶらせ
うの馬の息の縁^{いき}ふかるがやゑく面^{めい}を
掛けといふ洒落^{あそび}ふらんと或人なり^{我衣}
ふ元禄の頃やとあるとあるの譲^{ゆき}そ^シ宝曆
年間生で駒込追分の縁屋^{えんや}のば本馬
の看板^{かんば}あそ^そとぞ

用捨箱上四

是も又古老の話ふ木馬ハ真粉馬の看板^{かんば}を^を昔^{むか}へ真粉馬船^{ふな}の鳥^{とり}一對^{いつ}の物
タリ一^アタリ今船^{ふな}のものありて真粉馬^{まこま}の絶^絶すと。此說ふより再案^{じあん}るふ

毛吹草^{寛永十五年重刊撰}

あんこ馬も今やひくうを月夜 弘永

理草^{寛文元年成安撰}

あんこ馬の實の候を鞍^{くら}付^{つけ}あんこ馬

木王

。あんこ馬の實^のも

吾妻^{あづま}の房^みへ鞍^{くら}付^{つけ}の馬 西鶴

あんこ馬の實の房^みへ鞍^{くら}付^{つけ}の馬

全

あんこ馬の看板^{かんば}を^をすと^すり^り説^せも^も捨^すじ。又古くより白糸縫^{いと}と^とあり細^ほく縫^{いと}だり
考^かれ^れあんこ馬の看板^{かんば}を^をすと^すり^り説^せも^も捨^すじ。又古くより白糸縫^{いと}と^とあり細^ほく縫^{いと}だり

後大矢教^{延宝八年吟}

同九年刻

あんこ馬の實の房^みへ鞍^{くら}付^{つけ}の馬

全

方物を馬の形うまのなまあらざれど異名と瘦馬ひそまとなり是もあんとるふ對さうこの名をす

花紋日享保十四年印本

言石撰

白糸縫しらいと楊枝ようじのむちや峠茶屋とうげぢや作者著者關

如びく多おほを附つす又信州けいしゅう小縣郡こけんぐんの今いまの風俗ふうぞくと記き—冊子さつし小涅般こねぶ大會だいわいの日ひまくそあんこ餅もちの細き物ほそものを作つくり糸緋しふの人ひとふああらをやせううととりとり事ことあり享保けいほの頃ごろもやは物江戸よしのゑひそり故ゆゑよ峠茶屋とうげぢやと向むかは作り—ゆめあらへ再云自糸縫しらいとを細く縫ぬいて物ものよりとりひひそ証たし

徳元獨吟千句寛永五年吟

絆むすぢあひあひても錢せんとやりやる

あら糸あらいとを餅屋もちやの棚たなふ賣う買まて

續山の井季吟撰さく

用書箱ようしょば一五

縫ぬい雪ゆきを白糸しらいとすす柳やなぎの耶や 宗房そうぼう芭蕉翁ばしやう別名

養生主論天和三年印本小白糸しらいとむことあるも是これすするの實じつの名なも此書このしょふぞくす

四よ後ご暗くろい觀音くわん

昔むかの常言じょうごん不ふ藥師前やくしじま地藏じぞうの後のちといい事ことあり是これハ暗くろい夜よの事ことるる藥師やくしの縫ぬい日ひ八は日ひそそるる七しち月つきまでま地藏じぞうの縫ぬい日ひ八は日ひそそるる後のち八は日ひそそるる南華なんかなるる

貞享年かね本ふ曰い「昔八月十五夜の頃まことに寺の上人同病ううびを連野れんやおづれを傍通わきどりあり且し了りふ此所こりそそううドドて日ひくくれれ盜ぬす人ひと歩ある人ひとををまますすトトヤヤススややふひくく此道みちをを通とりりるるととよよ入い日ひ古いより藥師やくしの前ま地藏じぞうの後のちといい程ほどふ今いまの盜ぬす人ひと出でままづづ一いかかじじとと不ふせららるる同どう宿しゆく又また曰い。藥師やくしの前まと地藏じぞうのうしろうしろももにに盜ぬす人ひといいままづづききととりり上う人ひとひひぎぎ笑わらひひああととよよ事ことあり上う人ひとがが月つき夜よ多た多た盜ぬす人ひと少すくなりりととりりとと同どう宿しゆくののああらえらえひひああらうらう又また雄長老ゆうじょうろうのの新撰狂歌集しんせんきょうかじゅ一い卷まい「ますす寺て」

地藏院

藥師院とそり地藏院の好薬師院は若風と好れば門外れを立て

まきぐへ詔御やくーの承しろ毎ごろこうの蟻のこうごう

些一院の名實よひやくーあむぎ承しろの趣向とまうけそれをひそとせ作り
うべー是慶長元和の頃の狂おき暗き灰の事よりとい考へて用みれど此
謗あくまのあり證あぐ。そもそも觀音と最も後暗い寺地藏の後とりひーふ
同ト六觀音の縁日と十八日より配當ーて廿二日ふゞする七觀音や、觀音の縁日の後へ
暗いと轉じて解たべー是もかく謗るべけれど毎月の更とゆゑを耳もやめあき
そ付りか姿と見れば如意輪觀音など矣。うちわすが後向ぬふとそちろ
えひとく樂阿弥ダのよやうこれもいそれあり二十ニ身の外不共日より尻くらひ觀音
とそこれあくまふとゆひうや當時尻喰ひと思ひ僻めーあくべー

「五」錫取。拘子之古製

錫取公家とりひきそーめそひあひを老懸とむけるをひづき老懸と俗ふ錫
取又金取ともいひそ今厨と錫取をりちある家とあくらあれど草鞋足半の
形不作れ古製ハあらぞひそき扇の形をひる彼老懸ふねく故ふあらひ
あり左不摸ー、画かそ其製りさまを不知ふべー鹿苑院殿御元服記 義和元年三
月の条「御車新造自東寺御輿御力者十三人牛飼五へ難色九人車副金
取以下」とあるハ老懸をつけー者の供奉の事を記して金取らひの最古
又大平記抄_{慶長十五年著}北四卷卷縛の老懸の注「老懸と下との者の錫取とあらうる
物を」と見える。寛永十九年の或記不「浅黄指貫冠錫取持弓肩矢」一あり。
貞室のかまどとくやー慶安三年印本不「絆を錫そとよことへか」と制ーれどその師
貞徳の句ふもやも。ちくハ假名字例延宝四年印本不「かくや、絆冠具野俗ナベトリト云と

あり今も老懸を知らざる者あく厨の鍋取へたゞる人を不^トクベ

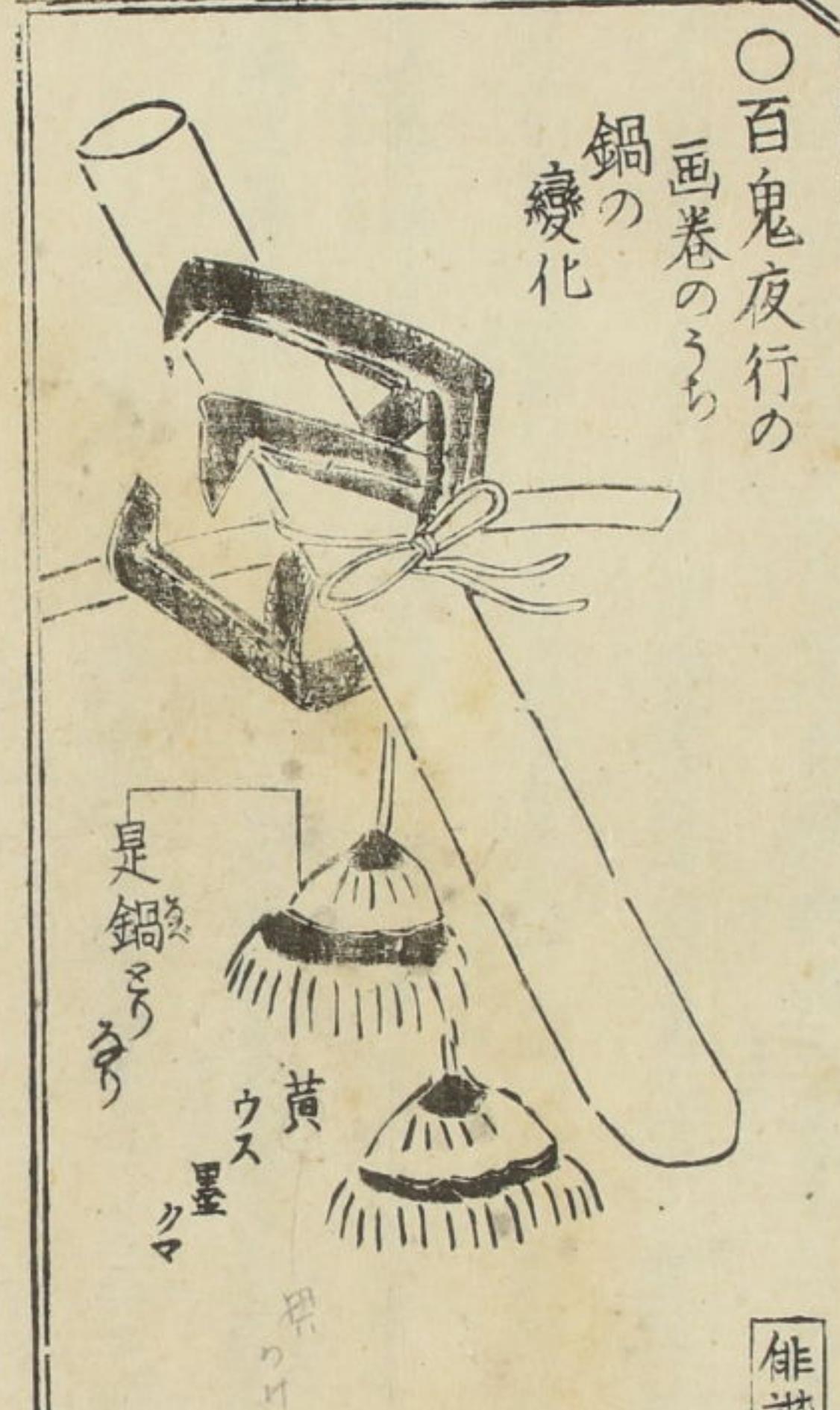
油うき
寛永二十年編云

公家と武家とあくづけらす

あべこう鐵かぶとのつまみかくすけ
前句不二頭とあればかぐり物を二つ合。武家由。老懸公家と附するなり

俳諧三番鶴
元禄十五年印本
了我撰

前 下妻と八重ふ
打合春の風 一林
附 二放さうじよ
柳翁雲
尾も櫛を
あうすね
そそくゑ



用捨箱 二七

○百鬼夜行の
画巻のうち
鍋の
變化



空林風葉
天和三年刻
自作撰

鍋取者でよろしく
豆踊る今宵の天

流辺

柳子

上ふ録一言句
まくとくりや
あくをば鍋取の
形を蝶ちの
翼ふ
えな

此画の杓子の柄は曲れり安ホリ不廿日ごとくの如く云々故ふ杓子定規の諺
あるるべ一此古製百余年前まで江州足賀社より守てふ先を杓子のとふ
説もありとわざく左の草紙原板寛永十一年刻まづ見る物の品々の段「大工のかみやの
を檜物屋の仕事。まづのつまづあやく」と並べせり。又俳諧も

玉海集貞室撰明暦三年印本

西がみより もも壽命 みがかれ

正式

みど見えたり 蟻 蟻とをす杓子となりふも玉毒とひめとひの諺 水中毛尾のうびくとうざめくま
柄の曲である杓子ふ似く故の名うる事必せり今のかみやの杓子へ常の杓子ふかそ
らねば蜘蛛も似ぞ柄ハ定規ともうるべく真直モ古制規を失ひ

〔六〕六郷酒匁之土橋

用橋箱上入

六郷の橋絶て後去橋のかや一事のあり酒匁川も又同ド千葉日本鐵
相州枕川小橋ある事ハ霜月十日よりあくと月十日まであり此日去橋
して歩行りまづきりとあり夏秋落水たびきときい妨とろり故に船の
冬春のまづりあく少霜月とあれば十月より掛へ事もあらずともやく

五元集

神の旅酒匁の橋とまづふけり 其角

とまづくとまづ。まこと六郷の事ハ誰袖の海宝永元年印本小六郷の渡し爰も二月より
九月頃まで去橋かるとあは九月頃より三月までとりふを書誤アリ

筑波紀行橋の實

享保五年

蜀黍や思ひのまづく葉よまづれ 五株

六郷それでかまづぎの橋 貞佐

撰者

六郷の橋かずきはそれで此處の橋かずきがかれりといひへり。前も記きを如く酒句さうじも此所も
祐こうち橋はしのえければる。されば享保の頃ごろまでもを春はるの去橋かすのかやく飲く
元禄十四年不角ふつのすみ紀行きぎょう笠かさの體たい六郷の条じょう此橋先年大水おおみずふあひて今いま長柄ながなの
橋はしの影おもがとより此渡わたりの船ふな賃はり或ある家の外ほか二文にまいとゆり去橋かすの掛かりへる
當時そのとき元禄のれど標題ひだいも知しらう如く五月ごつの紀行きぎょうあれが去橋かすのるきこむべ

七 背せきの祭まつり

赤毛川あかめがわ小曰おひがい「廿日本所邊そんほんの祭祀まつりの女中の衣類いりゅうを借くわてよる」との事こと。此これ
赤毛川あかめがわとの書き種たねより是これは文化十二年ぶんかじゅうに九十三歳こひゃくさんさいの老人ろうじんの筆記ひきより逆さか養ま
まれた翁おきなハ享保八年こうほく八年の生うれは享保の末すゑ元文げんぶんの頃ごろと云いふれはる。

能譜太郎河のうほたろうが印本いんほん享保十五年こうほくじゅうご

用替稿ようばいこう二九

前句まへ 番屋ばんや島しまの已い見みぬ 秋あき午ご寂ぢ

附句つけ 小野おの照ひる君くみ袂そで袂そで小黒こくろい 腕うで 全ぜん

附つけちこくめの秋あきより小野おの照ひるの宮みやへ下谷坂しもやざかえ。祭祀まつり九月十九日じゅうくにち。君くみが袂そで小
黒こくろい腕うでと女の衣きぬを借くわふる事こととひて祭祀まつりと呼よせ。秋季きせきの句くふある事こと。

前の翁おきなの筆記ひきを見みれば此この祭祀まつりと呼よふ事こと。祭祀まつりと呼よふ事こと。秋あきの季きを
りと後あと世よあは解わかく難むずきりひもまよまよぐ熟なまめぢぢとと廿に日の質素しそと目めすふ足あり

再接つな小出来しりゆ京土產きょうどさん寛文四年かんぶん作つく二の卷まき常盤じょうはんの古御所こごしょとそゆるそゆる此こ紫野しののの古
御所こごしょの事こと中なか三月十日じゅう此この祭まつり安樂やすら花はなとと賀が茂しづ上じょう野のの村人むらひとららく
の小袖こづくふ素袍そふ袴はまをを着きて刀と毎まいふ打うかか留る太鼓だいこ鉦ぼんををうして踊おどせ
ゆる犀さいの鋒とり神脚幣かみあしととう。其拍子物ひきものの詞ことわふ。やまとひ花はなふとと。見物みもの
人ひと多くつどひ。借くわふを小袖こづく棘とかけふとと。が村民むらじんをを腹はらすとと。印地いんぢふすとと。人
多く揃そろづけけを今いまでかる危き事こともも云いふ。又また能譜類のうほるい船ふな集しゆ梅盛うめざか著あらわ廷宝四年ていぽう刻こく小

「やまとうひ花火の衣裳を借てつとむと久くともよひつひの祭りゆも借るまでも」と
見えられが何闇の祭礼ゆも借るして歩るが昔の風俗をうへてむべし

八 粥の木 折かけ燈籠

昔の質素をうじるを今ふ古風を存するは正月の式と七月の魂祭で見る所
えりの程ふう絶江戸近き田舎ゆの残り事ひ其二ツを記す

向の岡 不ト撰 延宝八年印本

粥木 かの木や女史の箸の二柱 戊丸

撰者不ト江戸の人より戈丸の難波の産るがくわらとより江戸があり。されば
延宝の頃まで粥木といふ事江戸ふあらず故句も作り集められしるべ今なる
名はふちを江戸近き田舎ゆの猶在所もあくを以て異なり此の不く今まるの越谷の
東大川戸村八里程の古人の話なり。彼のうゑて正月十五日楊櫻と長き箸有程四百

用捨箱上十

きり頭のかきを削りけのやうふ化り鍋の粥の煮てもとその頭をさすがにあふ
あ返して門の兩脇へ一本づきをありと。戈丸の句是きり粥杖と粥の木といひ異うる。
六。魂祭ふ昔のちの折かけ燈籠も江戸ゆ絶えうむ物の本ふやくろ種々と抄出せ
俳諧世話盡兼応三年土佐四
皆虚著明暦三年刻下 折かけ燈籠。腰折燈籠と並び出せり。又。五人女貞享三年印本
五の巻ふ「あき人の来るまちの業とそ萬尾草折れてぬるよびとけの枝豆れぐ
お折かけ燈籠。うとか木棚經せり」とるどり事見えり

洗濯物

一雪撰 寛文六年印本

親の鬼子ハシラヒキ裏虫よ 撰者

火をこりを百合ハ折かけ燈籠くる 信直

續塵栗

貞享四年刻

折かけ張ん月の毎月 野馬

秋の日

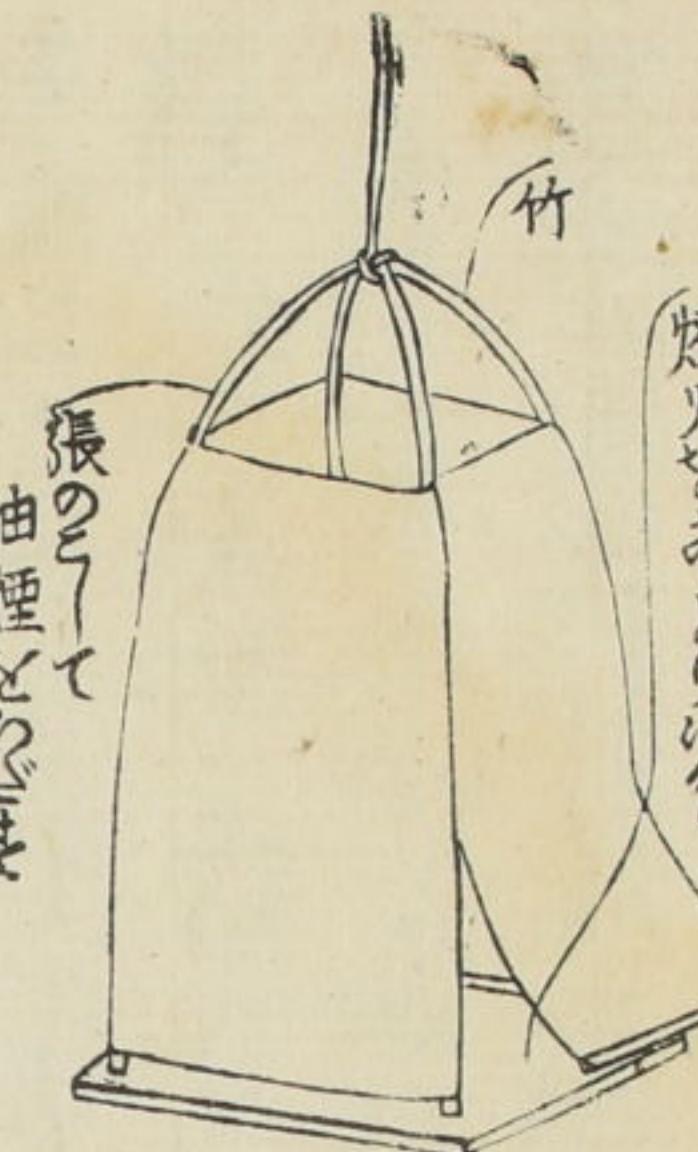
袖まじより妙出原本未見

色黒き下駄つまびてかゝり 亂彈

切箭 折りけ 淫き 夕ぐれ 一井

此折りけ燈籠享保中まで江戸やもひやう事ハ父の恩と証ことぞべ其画ゆて
大略の形を知るのみ也しが友人某檣樹郡左尾提の地花堂ふ数多掛あしを持
來す。初て見ゆり彼所こそ今も魂祭で小用ひそれをば堂納めらるべく

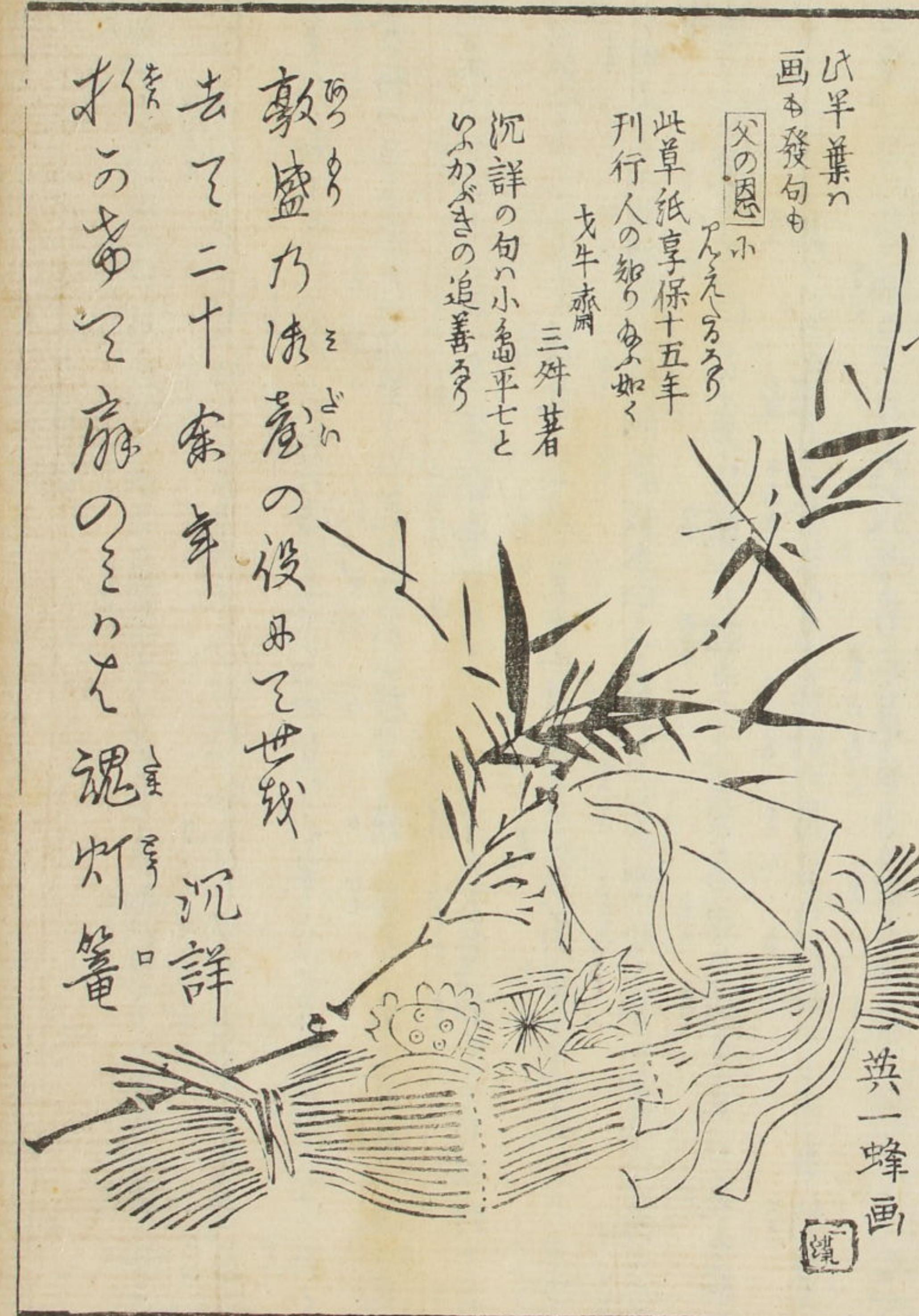
其圖



竹籠を折りてその便桶きわきをもとを折り
桶おけとりふ。ば燈籠も竹を折りてほん筋
骨のの名なり。賣物老へるく家いえもそ
つくりとがくよく竹をあらそひあ
るもあらえ名の如く折りけとまざく形
のつらぎもあり一々不異ふりじこそ

○左尾村右川傍よう二里をう雀見の川わより

用捨箱 上十



父の恩

瀧

此草紙享保十五年
刊行人の知りゆふ如く

戈牛齋

三舛著

沉詳の句ハ小畠平七と
りかざきの追善也

敷盛ひらめたは意の役ひみてせ残
去よて二十案せん年と
候まのあて扇せんのりと魂ま灯とう籠ろう

沉詳

九 か事始

節供とひへ此日必神ふ物を供むる設うんとあまふより如びりふうされが節供と
りひて食物の事とせら理るきやのひうきドけれど女童ハ唯式日の事とありひ。節と
のひへ却て正月式日の食物の事と思ひあやまれり。が事とひも彼が節とひふ齊く
食物の事やそ是れ僧家より起り在家ふ移アリ歎と思ひる事あり 無住雜談集
三卷ふ「昔ハ寺々只一食そ朝食一度あけり次第ニ器量弱くして非時と名
づけて日中ふ食し後少へ山も奈良も二度食を夕のシバ事と山あらひて未申
の時乍り小漸時して法師原坂本へ下てねれば夕方寄合て事と名づけて我々世
ト事して食まとひ」とひ事と載す梅るふ十二月ハ月の短き頃あて年の暮る事
せすくくう故ふ八日を限り二食とするが當時の僧家の風俗ふーそ事納めと
至る。二月ハ日も漸きくやられば八日より二度食ある故ふ事始とひふあらむや

用捨箱上士

二月八日ハ周正不依ル秋迦佛生日より十二月八日止ム此日調むる汁をな事煎ヒテ
浴佛日事 事物紀原 小見えれ此是第ノ候此日調むる汁をな事煎ヒテ 徒弟慈意得焉
芊午房人參やうの物小粒赤大豆をりき近年ハとて又案案より赤大豆の汁小漸
油を和ヒテ煮する豆腐閣を黄檗豆腐とひが事煎もその類也赤大豆あそ
味をつくるは僧家の食物るもがきベー古風を守る家そひ此汁庶食小調じて
朝ハ調せどそ原ハ知くもヒテ自然小廿日風俗の猶アリアヤアラヘ 雜談集
山とりすハ叢山の事そり彼所ニ事始事納の久く僧をみてゆりしひ故ありて
寛永中より江戸の在家へ移りしるべー是ハさうよけ證據もろき異説ゑ
ど思ひうづき小書載てあきつ扇の透へ捨タ

江戸鹿子 載「二月八日事初 江戸中モ翁をつるる 十二月八日事納上同」

誰袖の海 宝永吉原の事を久條「二月八日事初 師走八日事納め」とひ
此日吉原ハかぎくど棹のさきへ稱はけて出で京の卯月八日の如ー」と

はを今之俗ハ二月を事納十二月を事初とありもあるより正月の式
ふかまう一事少く二月が事初めよりといふ証ト錄を
きそ同事とあると記さんも見ゆふうと記べられ此日目録と出と由縁を引
書日もかやく略記のうと云べ是ハ參州遠州の風俗の移りてりと彼國にて
ちがいの日本生と此日誤りハ醒翁の考へられる七夕ふそゑべき牛馬を靈祭の棚不
せん節分の日生と此日誤りハ醒翁の考へられる七夕ふそゑべき牛馬を靈祭の棚不
かく類より昔より目録の鬼のかそとひるえり是ハ目録の底の角々ハ☆如氏
晴明九字或曰暗明文判といふ物それがより原素の俗談唯古老の傳へを記す

を一後千句

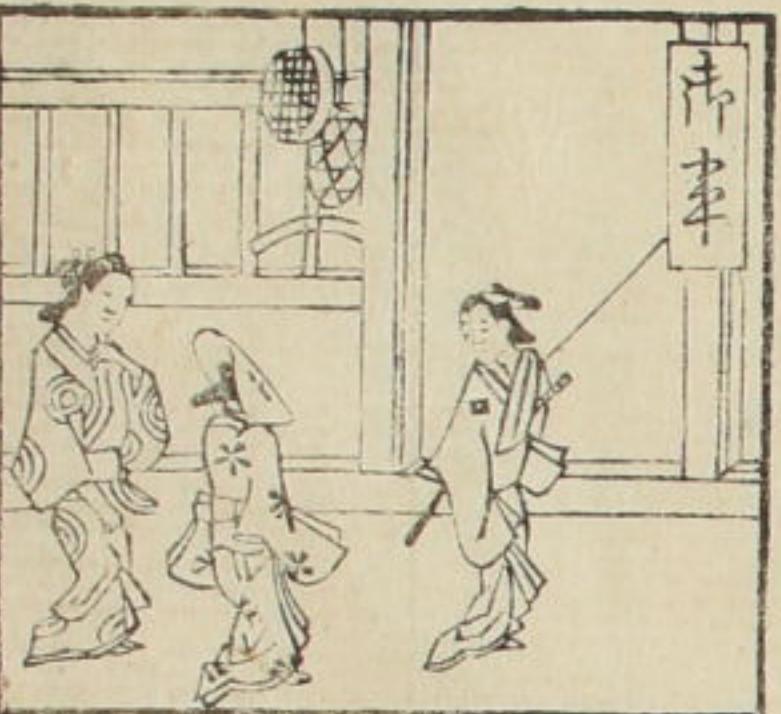
慶安三年咲ト云云

目録の目をぬく作り詮もる

悪魔いまドとつしめる門

此句を事のこゑがならざれど目録の目を鬼のかそとひるえり証ふ所

用語箱上十三



萬世節用集廣益大成

宝永三年印本不載する。年中行事月並世話

△二月八日御事

とりよ支極月八日門戸不錠をつゝ

字彙

事ハ業也ト云云

二月から下り十二月御事をとり田家をもと事たり

事なり。家門戸不錠をつゝ

字彙

事ハ業也ト云云

忌也精進をもとといふより春ハ農事のすじめ冬ハソノリされば

祀義より八日も

發日の中ゑれば

此日を用ひまる事ありし戸口不錠をつゝ目録の目と云ふ方相

の目ふるぞら邪氣をならぶ事あり。金葉遼多の今ハかこの目をあらむりそ

ながれん名こそとくれ。方相ハ邪氣のあそと物されば其面をかけて儻のとき

追うらる事あり。或説ふは目録とつる事ハ九字の形あり。目録ふ似

る九字と云。臨兵鬪者皆列前行の九字と道家の秘咒あり。

今ハ佛家も用ゐる。居家必用也と云。縱横之秘法

門舞

門内ニ立テニレラ咒スト云云。九字ト云。纵横之秘法

同心也カゴヲツル事ハ縱横カタチ也。画もまき模不あら

農家ふみき事よりとりひへ予が推考とて異なれど此説尤かるべ
説あれども准人かどりある古書を引るのみ
当よりとて思されず故ふちよ不載 筆の目の事はあふ云或説と予が少くと略
同書 檜るふけ書の作者も老人の傳へを空へり九字とのと少く時九字の
同事を空ひらへ 筆目そハ無ふ似ざるも意味増濂と二ツ画へり
江戸席子 ふ筆と
つるとのやそ此書と同されが画の如く門へ約。又今のかま小棹を高く空へへ袖の海
モ明るり 此草紙の作者ハ由え軒と京の昔より古御の人江戸の風俗を知りせん
モ都中ハ灌仏の日アトの枝を棹へけて歩き奉る毎月八日の始と記す
三州の事を
知るが遠州少く即分の日棹又帆とづて歩きとばあく見くと友人の物がれり
江戸坐かの追儻小舟き板ホ晴明九字を書されと格を門戸へさへ赤輪と角入ざる
旧家あり ある傳ふみひと暗キ夜鬼の遊行する事あり其夜
さうぞき用あれば日輪をとて歩く者多きが爲め禍あらうとの事への詰り
それ少く思ふ
筋分ふ船へ出をべきをか事の日ふ例や半りへとりへ説へ是るべし

十 伊豆山之櫛

昔ハ伊豆大權現を信むる者あとふも不りじとぞ

琳表座之慰

慶長より延喜四年
うちでの小歌の集

用捨箱 上十四

不載あるるけや「そんごだざくべりてまことたゆき伊豆のあとのるきの筆をかひのす
らぐのあ山のるきの筆」とひるハ女の男ふらるすり意ハ彼所の櫛葉を守り
きうとそ鏡の裏へれちく事のあくへ故り

俳諧毛吹草 覧永撰

正保刻

あごの葉城櫛よりわの鏡あみ 宗房

芭蕉翁トハ別人

櫛のかくら不齒菊の筆をりちる。とりひうける鏡餅の句えされば寛永中より
ひやく事より近く享保十二年玉菊二面忌追善淨瑠璃水調子 ふ「ふも
らぬ月のあもくは櫛の桔葉の名ぢりふ鏡の裏ふのところんをがへ縁ふ瑞りん
とゆるハ櫛の草紙のまきあかどひきねの余のあひと櫛ふかへるるる

俳諧夏の日 享保九年

印本

前句 翼立 人ナ空翠 奉公空翠

附句

なまきの筆葉ハ鏡のうちのこまされ草 莢雞

ると見あれば此事もちる享保の頃ちやハ流行つるうべー或人の日風のまぎ
海のまきことどりハ和氣。南天を難轉ともろの類是も名詮歟

[十一] 六方洞

昔取とどろへーの男達の事あり故ふ當時の寛闊の字をやうこと訓び或も六
方者と云ふ事ハ其月の物語やも出で人の知るところあり。洞も多まぬことを忌。序言
と好んで云ふ。かくぞうのを。かくぞうけるとのべ。洞をゑ。とづひるの類かそもなし
難い。事とぞえど。うちかうと。がくけ。のを。やがて。のを。関東がべ。その様とかくま似せ小袖
のあきらこ短く無双の要刀ゆつとを長毛を向ふさへとじまと振て動ぎ生。彼六方
洞。名のうれきんどうを。演て後狂言小かるが並て當時の風流りをりき事とも思
まれゆく昔ハ専あるそれとをがくそ六方洞のを集め一画草紙友人豊芥子の

藏ふ所り一葉もまくらへゆく同好の人ふぞをまわらま

かうりみのりこゆは 義門彦九
かうりみのりこゆは

あこけあやつもあめてもあれまうて年ひすくたのやぢりくまらせ
ぬあんでももすきあひどくえけひとくしきをひがつ代かかくすて
つぞのゆひえんをうすやひえん

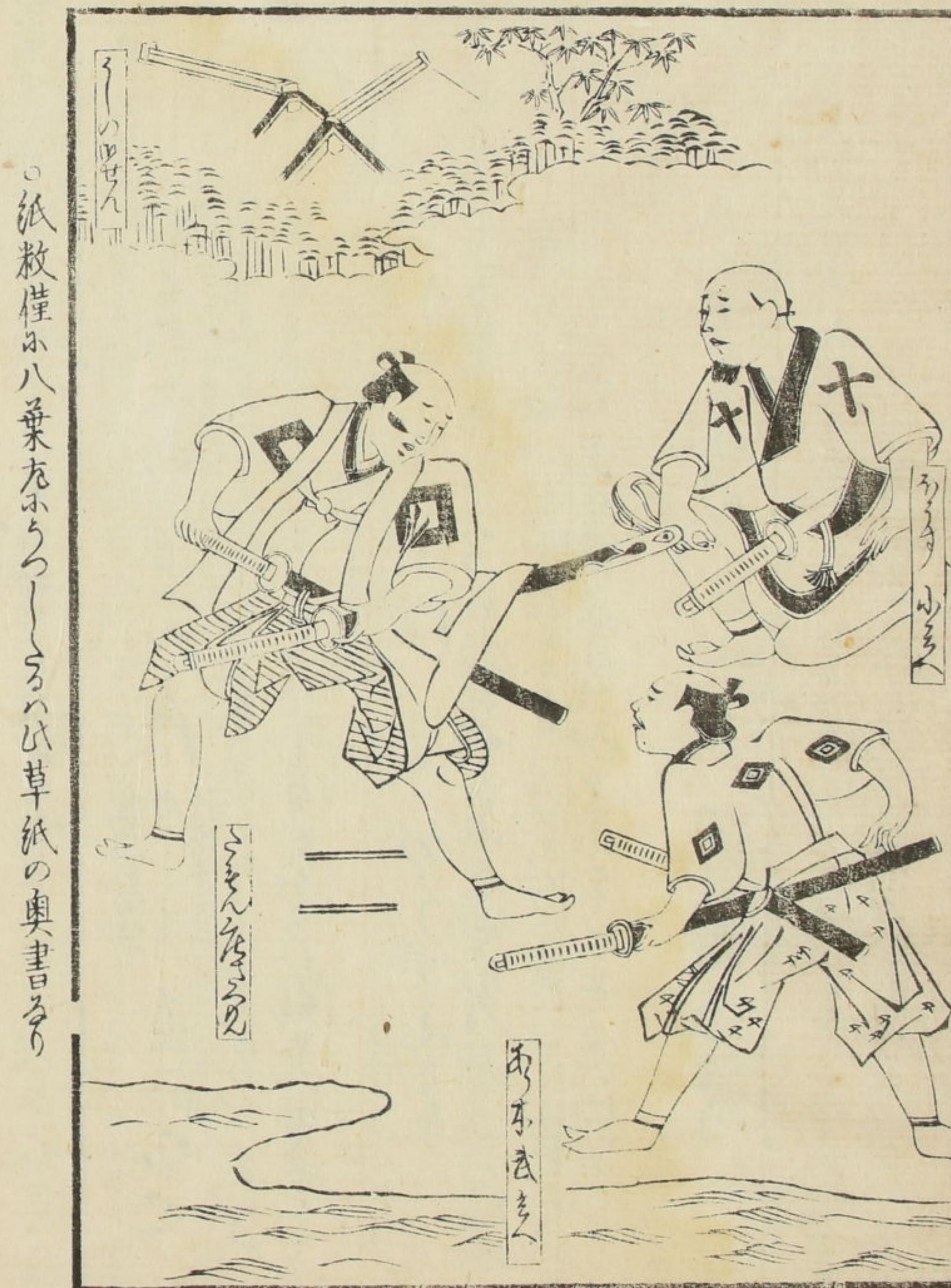
かうりこゆは

がくずふき

一ひでのこくはもあれあらわんふぞぐりみくやかく。まよ大あひ
ころもぞくもじくふきぢらやゆりらうえらうやせこしがもあん
ど名とぞうみくすくらうふどうみよみくらうあきよいげひでく
あかざか

みのりこゆは

あくき式多



紙教僕の八葉左ふうしるは草紙の奥書なり

用捨箱 上十六

右はかせ弓道有教多様あれあやまり
弓之友只そとあじえぬはあらんを傳とて曰く
ゆく一弓も不敵写えと教行とも也

丑ノ二月上旬

三の町 正本屋十右衛門板

○丑の二月とあるハ延宝元年秋未考

是より前か是等の草紙教種なり事此奥書が見えり。あれと以當時
の流行ありひやうべ。何もあれ六方と標題をつけ一草紙ハりと書人の
手を下す。秋か冬の三ふねを大路を以て商人を集め。いとくと六法と名
づけ一画本あり。それとなくまづ遊女少くとさう似氣き。彼六方詞をそ
已くが名をよのる詞をよふ記一吉原六方と題しておれと彼をよみ六
方と草紙の附もよく似て是又一葉づとき模めて出ま

此とある六方の笠亭仙果屋、熱田より可惜梓彫の年号欠されど延宝年
間の物と見ゆ。第一小海長賣あひをかゝるハ初春ふうそ來り一色あうべ
文化の頃より江戸やは商人絶えなく今事すこそ下余楮かみ唯かみかんより上ふてえよ
見の利実うやかかへうそもそのもともとのとく海苔うなぎの事ことを二つりふべー。葛西海苔うなぎ毛吹草
葛西海苔うなぎ是を浅草海苔うなぎといふとゆづれ誤り。ながら葛西のせばちやく
葛西海苔うなぎ毛吹草諸國名産下總の条に

いとあみだわく

こまやか庵おごうらにさんまひほんぢかごのい
せん代りあもかごぐくよかよそくうのう
のをすへきよはくそりあうとさんざうも
もくらうあくもりめあくらんぶひト
きいせのりもとのうそくいのうわく
さのつもハいじくあきどすくもくう
からあすくとめりまハナづくさく
らのりあくと野山やまをあとのくや
あきハづくづくうらばのうふゆのむ

寛永正保の頃よりあり証たう六
月か廿日廿の葛西海苔うなぎの浅草
の年ね似おなる牠めとぞ故ゆゑ小六方洞
ふつそれとく秋あき今いまもく不
あるひく異ことり
能諧玉函箱蝶々子撰たんぽう延宝四年印本
行徳けいとくや汝なもられば

葛西のと

破扇



續江戸砂子享保元年印本葛西海

苔うなぎ。葛飾郡からこし東川ひがしかわ舟堀ふねぼりの江え。
今井いまい。これ等の所そことす其所ところ。
そそ製せいを名産めいさんを浅草海苔うなぎ
小似おなて異こととえ又また葛飾記

寛延二年かねん利根川とね云い云い条じょう近年

も鰯魚いわしうなぎ生なま葛西海苔うなぎ近ちか

年ねかかとゆふ考かうかかふ

此海苔うなぎの絶絶うハ寛保一年かねんべー

此海苔うなぎのよきどり草紙くさがみふとえり○浅草海苔うなぎハ寛永かんえい

の料理物語りょうりもの語小野善也おのぜんや。品川海苔うなぎの事ことのせせと花引はなび方かた寛文年間かんぶんの撰さん俳ひ桃もも

色いろを交か品川ひんかわのやや春はるの海うみといふ兼豐かねとよが向むかるのみ

森もりの海うみ遙とほをすす淺草あさくさを製せいする事ことの海苔うなぎハ則そは所ところの海苔うなぎとすすとあるを思おもふ

昔むかハ生なま海苔うなぎと品川ひんかわのそとひう。然しか今いまハ浅草海苔うなぎの赤あかを帶おびくると品川海苔うなぎとゆ

色いろを交か品川ひんかわのやや春はるの海うみといふ兼豐かねとよが向むかるのみ

森もりの海うみ遙とほをすす淺草あさくさを製せいする事ことの海苔うなぎハ則そは所ところの海苔うなぎとすすとあるを思おもふ

昔むかハ生なま海苔うなぎと品川ひんかわのそとひう。然しか今いまハ浅草海苔うなぎの赤あかを帶おびくると品川海苔うなぎとゆ

男一木芽漬

元禄十六年印本

物の名も所よりてかすり入り品川海苔の伊豆の板解

とうふ狂おを載らし六方洞 ふらそりもの名ゆり伊豆國ゆれ今もあら歎不知

よし原六方

先さはすれりつゝとくもすとく
でと牛馬れ作馬をありてすり
あくばりをかひみどりうねまく
うちへあ乃るよりのあせす
ばれりぬれりぬまむらうはめをも
うくねれりぬれぬまむらうはめをも
つてくづくればれづくわくもく
のをくまくまとまんじくとひくく

ちのけのもりぐれをくらゑひの
まくれをゑひのきるざれよまく

○上ふ摸しる吉原六方と
板木今ふほりてありとせり
按まふおもふくらへる六方洞
三種のうちゆい此草紙吉原かく
寛文八年印本吉原六方ふ子の
跋小尻もむをなぬゑみださりく
それをうり又こそ吉原六方ふぞ
キーネキテ一袖が三ふこと
とゆりは文うつやうゆせど袖鑑
も是より前の刊行よりされ此吉原

用捨箱上十八

かのちよいのゆくとくらむく
よをくけをとくとくとくとくとく
とまのとたまふひをひこれを
きよごくらはふくらうごくうのゆ
みくらへあくくりのとくあいこんど
足さてひう
とあく
おとく
すくの
あき
やマ
りか
うめ
あいと
くふえぐ



定家

正本屋

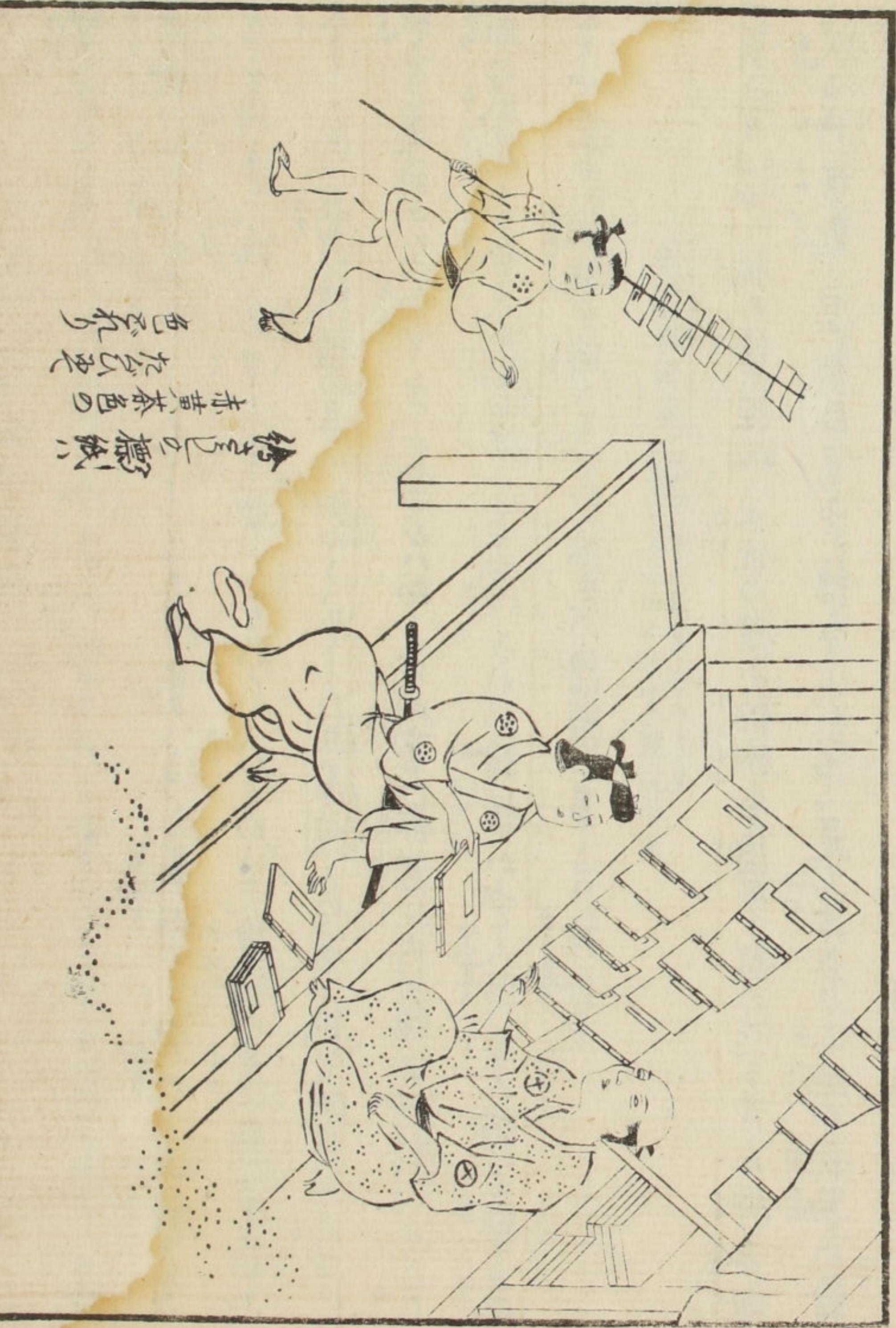
板

新町九玄湯とあるハ龜甲屋

或ハ甲を紅ふ作る
序の末ふ年号及作者の名も
あらへきべけれど廻ら

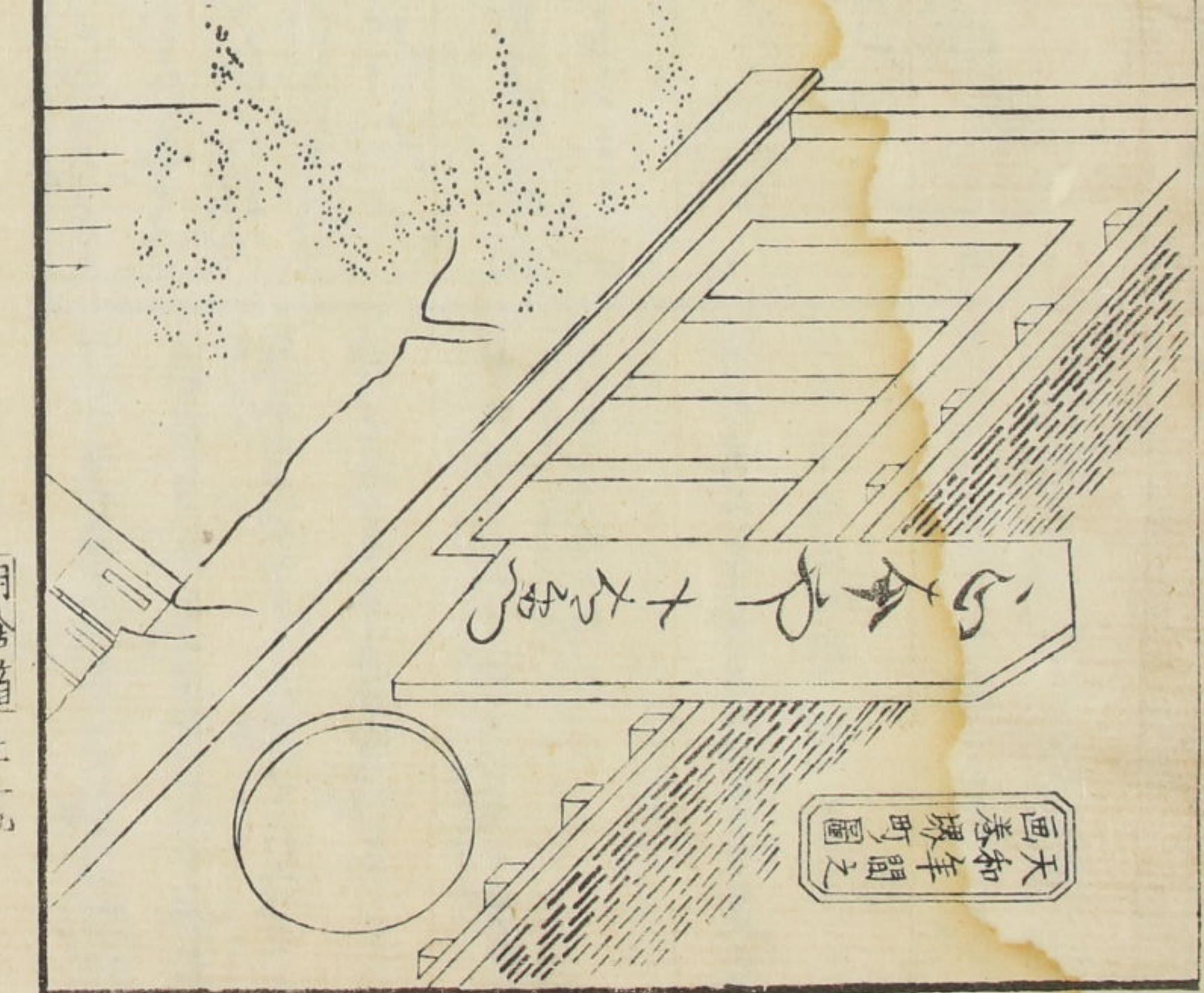
卷尾ふ如代正本屋とあり名ゆて
門の字のみ存かぎの六方洞と同
正本屋十右衛門の板抜

六方も寛文八年より前の彫刻
ふやくとん今ふ至りて百七十余年
板木の傳すりへ奇とくべー
序と卷尾半葉を摸す



此余風也の文
 冊子と割竹を新葉掛あへ
 貢のくら甚風俗と今海道の病氣や道中船の
 曆又繪の類在此竹とく
 くや磨作は山の春山

江戸の世男蝶子撰延喜年印本
 宮里へ則繪草紙賣る
 十右衛門の月見舟棚の圖
 ○第六方絶板元



十二 春秋之繪櫃

壁言べ万葉集ふるえうら古今を引くれし書ふある事をひらへて
考證の著述者の誤りふれどもうるき草紙の多くは散残りを証にて考證の其
書を得ると不得との事不辛ありて。それとて弃へかうど。繪櫃の考へ骨董集下
今一これど菊の繪櫃の事の細かうざうへ五節句とく草紙と醒公翁の得び
故き是前より不辛ゆゑ怠で失くも此書ハ俳諧仕内田順世梅盛門人京の五
筋の風俗を田舎人ふ知らせしとその作されば。繪櫃がき人形等の圖を載て最
多やうふせん縁故を解すりまづ弥生の繪櫃の事より抄出を

俳諧五節句

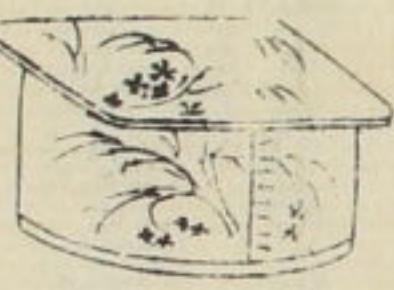
貞享五年印本改元元禄元年也
尚舟主人著書類本未見

三月三日云云一桃の繪櫃 柳同本地の櫃小桃柳を繪がく櫃の内小草の餅赤飯
も入る所臺匙とく物櫃是繪あり。おつ不。是五器より本地の挽物小繪

用器圖上二千

あり。土佐日記ふ二月十六日今日ようきうち京都へのがるほにて不見をむ山海の
小櫃の繪もまぐりのかやぢのりもかそくざりけり賣人の心をぞ知るぬとくそ
のあ。是節句をよ賣繪櫃あり

繪櫃圖



植物師の細工うり本地小

桃柳を画くをもともも

绘あり 大小寸方不定

繪櫃ふをも柳ノ郡 順世

嫂もきけ繪櫃よかゝる古柳 全

以上五節句ふ

此草紙ヤド繪櫃の事とくじく記すとくまを俳諧の句ふ

不えくるくまく

砂金袋

明暦三年刻

西武権

衣服をも邊りちひ櫈の内 翁舟

。衣櫈ふそりうてらひより

細少石 寛文八年刻
梅盛撰

餅と草花見る繪櫃多離雲

今撫姿 寛文十二年刻
維舟撰

若草の餘もこれる繪櫃多金貞

塵取 延宝七年印本
常矩撰

柳のひらる日小児うるや柳の陰如雲

不えりや櫃ふう見伏見の花宗雅

緑生内の松ゆき声や繪櫃賣如葉

松と書き
空林鳳葉 天和三年印本
自悦撰

まわの粉や嵐を埋む繪櫃の松知連

櫃賣もまう節句やおぞれ邊や敏可久

用捨箱 上丸

松と書き
空林鳳葉 天和三年印本
自悦撰

まわの粉や嵐を埋む繪櫃の松知連

櫃賣もまう節句やおぞれ邊や敏可久

用捨箱 上丸

是のをくど繪櫃の句が多くあれども考証ふ便あきに皆略つ
五節句 九月九日云云 菊の繪櫃 櫃の形ニ月節句不同其繪ふ葉
をかくきり内ふ栗も赤飯もりくすり脚臺匙あつ不阿リと記一形の
かくきり故るべ一圖をば不載又葉の繪櫃の句種々

隱サ裏 延宝五年印本
似船撰

九月九日 紫栗ふ葉の花候繪櫃うか 但安

雜巾 延宝九年印本
常矩撰

櫃の鶴栗の林ふ物そんべくすり 笑種
櫃の蓋栗のきせ錦るべ一や 一味

ノフや櫃もあげよかけ白菊ハ 如葉

山鷺の小櫃云云の注ホ「或人の曰女児のりてひをひ物よ小櫃

ふ丹青みて繪をうく京都そと二月上巳九月九日みどり童のりて遊ぶより

との事見えず此書万治四年の印本より菊の繪櫃も當時既不あらず。

さうふまことされば近制衣の繪櫃ふ此春秋と混して施と見えと画きたるを秋の雜ふつづき料ふ菊をゑぎまると思へばこらし其故に葉の繪櫃も頗るく

秋の雜へ近き事えればより若菊の繪櫃ひるふひれて秋の雜へ起立すも知

べくも正徳二年印本入子枕ふ三季の雜因ふ曰小窓雜志

貰小櫃を社人の千木笥といふ原雜の具る故ふ盆の花を画けり一年上方

より下せし船運にて雜の節を過て着船せし故に市ふ賣ふほゞ例と

よりより右小櫃を京大坂そとあざの櫃とく称生と重陽とふ賣京師

重陽ふも雜遊びする故也土佐日記ふ云云」とく事あり繪櫃ふ施

柳。松。鶴。茶。小物。りそと画キ事の多きとど紙雜の摸様ふあれど

用捨箱上卷

由縁ふきやもあくび此千木笥の説種々のりよりやかくやもさん人の心ふきせゆ人又云あざのとく雜く中昔よりの女祠そと版の事よりかの匙ハ杓子をだる櫃ハ版櫃あり大坂獨吟集刻宗因判附合の句「見よニセド名ふね葉ふおほい籠鶴永」是も繪櫃の匂欽小窓雜志と合せ見ぬべし

再云順世が引一土佐日記の文を考るふ貫之版一任園のうちふ幼き女をじしゆひゆり宇治拾遺物語ふ歎き此あふごろく見えり。さて。まぐら菓子やうの物。小櫃ハ毎ひそびられ土佐へぐぢあるを。彼と見るがりとめく事一と思ひりぞられ菓子のかゝる小櫃の繪もそのとまくおかむねとその女へ亡人とみりる我らのうちと賣人へ知らずとのそれ一うべ。予かあづらうざる土佐日記の注譯も見てとく。これど若考の如くもが九百年の古より

アリ、一童の玩弄具、アリとアリ、証するる、此欲と虫のせをあまう

〔十三〕 捨てあるとアリ小歌

元禄宝永の頃吉原を捨てあるとアリ小歌の流行せり。又あり歌の語勢も捨てあるとアリ。故に。もとん節と名づけ一とぞ。**福德男** 宝永年印本
又「吹びきく程声やさしく。さん谷下ふねーのあの子がもとん節をうるると。」
夕白利生草 宝永元年印本 ふ吉原揚屋の事。アリ余よ「三味線のこよの心も勇らん。順廻りの歌ふ柏屋の六がまもとん節をうるひたつて舞へ」と

アリ事あり又 **蕉尾琴**

元禄十一年印本

かりそめや捨てあるとアリ雪の宿 其角

此句 **五元集** や「もとてあるとアリ小舟を匂の題にて」と前書をあまう
其角も後世アリ吹えす。と思ひてアリ

用捨箱 上卷

〔十四〕 米饅頭の名義

米饅頭ハアヨリとアリ女の製し。アリ。故の名アリ。又常の饅頭ハ小麦の粉をつる是ハ米也。製されば如ヒ名づケレ。アリ。アリ。とアリ。が先達の説アリ。又。辨論アリ。中昔の俗語。お遊女をよみとアリ。がよみ。饅頭と女郎饅頭とアリ。義少アリ。其故ハ野郎解とアリ。人倫訓蒙圖彙元禄三印本 餅師大佛前小住して云々「佐々解。熟解。野良餅等口々」と見え同頃のかぎきの画本 **傳受狂言** の洞ふ「解ものうくござりますか好る。アリ。解もござります」又 **初音草啞大鑑** 元禄十一年印本「まる所のりちや野良餅とアリ。解を仕出。一ければ。めづら。一き名とアリ。て。アリ。大だん賣る」又 **木芽漬** 元禄十一年刻「腹中もさう。まふ向よりとアリ。解屋アリ。是何。解と。アリ。が。看板。アリ。アリ。アリ。四条川原の野良餅。是く。アリ。アリ。」と

ありて画中やもやらう膳ひん膳。大坂屋とおー 暖炉あり

○入禿焼 艷虚無僧 或室永初ノ刻款序 ふ「姥が焙る餅をも禿焼とりへべ

嫋娜く」との事見えより 禿焼は今もあり禿蕪の形を守へ後年の製るをも思ふふと饅頭とりへべ

當時を女郎饅頭とゆえり 由多野良膳禿焼もそれふ對して名

づけりあらへ五ヶ津余情男 元禄十五年印本 吉原の事をのべ茶ふ「米饅頭す」

そり買まふふーと とある遊女を總じけふー「方事や女郎さん

ぢうふかうされば此文きことえがつて欲あるも記さぬく野良。禿女郎。對

の名ふらんといふも 予ガ「癡論」より筆のつてふ米饅頭のあくアミをす事と

ゑべー寛文中江戸のもので物をあつり 短あふ見えくるハ 予ガ「米饅頭す」

著し還魂紙判りとんの茶ふ「同頃の刻本 酒餅論」ふ「光る

源氏のあくらへりんのある大將モ我りちぢむせのろうひけ。かきあた

と待ゆふ。金鈴山ゆのゆくねをも。りどりがひりづる米饅頭」をとゆきば

覽文中より名をかりしあるべ。又。國町の油汰 延宝二年写本 木挽町山村座の

かみきの事をりふ茶ふ「棧敷もそとくふ終日の慰みとそ提重蒸籠。

の色とふ艶うぶ温潔のまんぢう條縫金鈴山の千代がせりよの饅頭

浅草。木の下のあく一束」と並べて久り千代と鶴屋の女の名歌又 元の

木のと物語 延宝八年印本 「うち山此山を金鈴山とまうをよ 我都ゆそ

かよぶよの饅頭の根元ゆりゆきとまうをよあやうくうんせんとそ腰うねふ

もちやまとひてかくとそとそとよめり

さりよやも又ふべきとありひまや今るうけりよのまんぢう」

又吉原さんちや評判 榆林頭巾 延宝八年 さん茶本草飲食の部 平野屋

巴 燃り。松葉屋りくよ 米まんぢう。菱屋あらの のびうどん 是れ

遊女を食類ふ見たゞ一也 元裸前後のさう一みの米キラんぢうの事もさく見えてうきければ畧つ

第2序を一葉

七

摸し
ひとるみ六法
載する圖
當時やううり
ひきと
えみふべ
前の荷物相へ
のせうづけ
辻賣の
行燈を
看板ふり
者板ふり
あえ
あえ



○街賣の圖ハ刻本さくあるありてしかねどもふ記きを如くあり賣
すもあの行燈を看板ふるおどりうなればその見合せの料あらふ摸めを
こすりめてござるハ

用捨箱上巻



天和
年間
画卷
不見方
圖

洞房語園 ふ曰「金龍山松井何某ハ林鹿屋の元祖より中頃甘きを捨て
酒ふ戯き頭祖も漢ふ棄そられ漢又淺草解の時世と見るも猶念
今へむりよのちんぢうも朽焉 一磨」

さまでふ古くハアミえさる江戸八景の
折本待乳山の耄耋まよせよ米キラんぢうの
見世の圖あり至天表門の石板いはの下
らんとするなり角くそて大路おおあくよ
昔より此所をまひよくあり一四系
ひどく往來わざわざへりそ歩ても

賣ふるをさん

○翁の衣ア井
重箱黒ヌリ
藤繪

團扇

朱

此草紙元文二年の印本より當時の米さんぢうの家の絶する事是
ある
ゆそ明あきらめ

此句語園下巻卅四丁より後ふ摺すりる本はん二葉卅三葉の附卅四葉の故ゆゑふあり
卅四と丁附よつを延宝中かどえ流行ひやうし物ものの説林調えんとうの俳諧はいげふかやよそられども
歌うたふらふあらまそ延宝中かどえ流行ひやうし物ものの説林調えんとうの俳諧はいげふかやよそられども
米饅頭べいばんとうの向むかへ見えざはく。近くあくふらむくわらむ然なまも繭ねくら是いふとよそ考かうへられ
すはく故ゆゑありて記き一か羅ら一ら向むかにづくふりふべー又曰遊女よひをよひとづく語ご
譯あたへ吉原よしはらつつく草は元禄二年印本貞享年間作ふ見えざはくその事ことハテが著述せきじゆ文箱ひぶくの綴つづ。

上二葉草紙のせ小載おさいを近ちかくふ刻くまく。

用捨箱上之卷はん

用捨箱上矣

